

てん菜の Coated Seed に関する研究

第1報 被覆材料の種類がてん菜の発芽,生育ならびに
収量に及ぼす影響について

未沢一男・山本保・安部秀雄・村井修・多田正敏・野田弘之

暖地の夏まきてん菜栽培は盛夏に播種するため立枯病の多発によりて欠株を生じる大きな原因となり,これを防止することは極めて重要な問題である。

本試験はこの問題を解決する一つ的手段として,Coated Seed の被覆材料に各種の薬品を混入した場合の立枯防止効果と生育ならびに収量に及ぼす影響を検討するため,1960年に実施した。

その結果,25°Cより 35°Cにおける立枯率が多く,自然種子では 35°Cで 99%以上の立枯率を示すが,優良な Coated Seed では 30~40%程度であり,Cerenox(2回)バイエル製剤 4788 を混入したものが良好であった。

pellicularia 菌接種土壌のように菌が蔓延している場合は,自然種子では地上まで発芽して来るものがなく全部枯死するが,Coated Seed では 40~50%以上の発芽を示し,製剤 4788 が最も有望と思われた。従って Coated Seed は発芽して地上に現れるまでの腐敗を防止することに大きな効果を示すようである。

収量においても CeredonT+PCNB および PCNB,製剤 4788 等を混入したものが 10%程度の増加が見られた。

以上の如く Coated Seed の被覆材料に CeredonT.PCNB.バイエル製剤 4788 を混入,または併用混入することにより立枯病をかなり防止でき,収量も増加することが認められた。